

## 第 3 回持続可能な魅力ある田園地域検討専門部会

令和 5 年 6 月 5 日（月）15:30～17:30

## &lt;明石座長&gt;

- ・資料 1 にもとづいて、キーワードツリーを振り返ってみたい。
- ・まず空き家と〇〇。田園地域では 5 軒に 1 軒が空き家と言われおり、空き家を中心に皆さんに議論していただいた結果、空き家は田園風景の一部の大切な構成要素であり、例えば他の地域では、大地の芸術祭のように空き家をアート会場として使ってうまく機能しているとか、それがきっかけで移住者も増えるとか、そのあと継続的な利用に繋がっているとか、そういういい循環が生まれている。
- ・例えば大地の芸術祭は、非常に交通の不便なところで開催しても、その目的地が魅力的であれば人は来るし、E-バイクで会場まで行ったりとか、自転車で周辺を見て回るということにも繋がる。山崎委員からデザインウィークポートランドの例として、年に 1 回、街中 1 週間いろんな場を開放して、自転車で回りながら、おいしい酒を飲みながら、その町を楽しんでもらうみたいなこともいいんじゃないかというお話があった。
- ・次は薪。これも非常に印象的だった。薪をいろんなふうにとらえることができると。例えば、薪を使ったストーブそのものがあるって、エネルギーになるわけだが、薪がエネルギーと考えると、山はエネルギーの宝庫ととらえることができ、これからの時代、災害に強い街・コミュニティを考えると、薪を常に山なりコミュニティなり集落なり家にストックして、災害に強い地域になり得るんじゃないかと。そして薪はコミュニティを生み出すということで、例えば薪と一緒に切ってストックして活用する。それ自体が観光とかワークショップ、新しい産業を生み出すってということにも繋がるんじゃないかとお話もあった。エネルギーは薪だけではなく小水力とか小規模風力とか、平野では太陽光発電も十分考えられる。
- ・通信もすごく大事だが、田園地域のほとんどがなかなか通信環境の良い場所ではなく、光回線も届いてないところもあるし、Wi-Fi も使えない、公共施設なのに Wi-Fi が使えないのは残念という話があった。衛星インターネットが普及してきて富山県がエリアに入っているので、自治体として災害に強い地域づくりのツールとして、使えるんじゃないかという話が出てきたり、そこから派生してやっぱりこういうことを観光にしようというので資料のキーワードツリーのように派生している。
- ・観光では、実は歴史的にはいろんな素材があると。こういうものをわざわざ観光用に仕立てるのではなくて、今あるものをベースにする。例えば、農業も林業も草刈りも十分コミュニティイベントになる。都市と農村をつなぐような、何か大事なものになるんじゃないかとか、「ラベルの貼り替え」という言葉が出てきた。観光という観点でラベルを貼り替えるとしても、やっぱり食

とか体験的とか良い宿がないとサスティナブルじゃないという話が出てきた。

- 次のテクノロジーは通信環境と若干かぶるところあるが、こんなにテクノロジーとかAIとか言っているのに、田園地域に行くといまだに畔の草刈りを手でやっているとか、すごくローテクだと。こういうところにこそAIのニーズがあつたりするのに、そういうニーズが届いていないという話。補足だが、バスとかデマンド交通の自動化運転とかがあれば、不便なところでも住めるという動線ができるんじゃないかというお話があつた。
- 田園地域に関わる「人」がやっぱり大事だという話になり、地域を担う人材が必要。今は県が主催するこの専門部会があるが、本部会がなくなったとしても、それぞれの地域で継続的に議論できるような体制・組織が必要だと。ここには専門家ばかりではなく、その町にずっと住んでいる人も含まれたいろんな意味でバランスのとれた組織が必要だという話が出てきた。
- コミュニティについては、コミュニティがあればいろんな観光の取組みもできる。さらに「人」に紐づいてその地域の玄関口となる拠点が大事だという指摘がある。朝日町のバタバ茶の伝承館のように、いつもそこに地域の人が行って交流できるようなそういう場所が各地にあればいいという話が出てきた。
- 次のラベルの貼り替え。例えば田園地域の空間景観についても、ありのままあるっていうだけではなかなか魅力が伝わらない。何か価値感の変化を生み出さないといけない。例えば、窓枠効果という話が出てきて、そこに単に風景が広がるだけではなくて、空き家等建築物があつて、そういうすてきな建物の中から風景を見るとより良く見えたりする。山菜も取ってきたものを、高級な器にセンスよく料理したものをパッと出せばもうそれだけすごく価値が高まって、山の資源、おいしいものがすごく魅力的に見えてくるという話。
- 最後に、地域文化の重要性で、文化というものを真ん中に置いてみると、実はその田園地域の文化、歴史の掘り起こしは、一時はやったけども継続できてない。時間もお金もかかるし、大変なことだがやっぱり大事なことなので、掘り起こししていかないといけない、という話が出た。例えば文化の中心となる富山県を代表する博物館がない、もし作るんだつたら田園地域にあつてその周辺にいろんな文化的なものがこう繋がってるようなイベントとか場所とかがあつたらいいなど。
- それから派生して、集落の教科書が出てきた。集落の教科書みたいなものを各集落で作るといいという話。あとはお祭りが大事だとか、やっぱりここに住みたいと思ってくれるような場所にならないといけないとか。

#### <荻布委員>

- ・農家民泊の手続きを調べる際、迷子になった。観光課に聞いても、なかなかたどり着かなくて結局3ヶ所目でようやく民泊の部署に繋がった。民泊や空き家活用といったテーマでマニュアルが整っているといい。あわせて相談先として、分野ごとに得意としている事業者のリストがあると良いと思う。

#### <山崎委員>

- ・キーワードツリーを見て、簡単にはまとめられないと思った。多分時間軸のレイヤーと重要度のレイヤーが違う話がいっぱい出てくるので、整理整頓する必要がある。
- ・もう1回振り返って、何のためにこの会議があるのかを考えたら、魅力的な田園地域をこれからも残そうという目標だと思う。必然的にこれから人が減るので、長期的にたくさんの活動はできない。なので、長期的には「人が少ない地域」という前提で考える必要があるなというのが一つと、短期的中長期的にできることもたくさんあると思うので、「それをやる人は誰か」を明確にしていけないといけない。
- ・いろんなアイデアを詰め込んでいったら、人が大勢いればできるよね、お金があればできるよねってことがたくさんあると思う。では、いつの田園風景の話を我々は前提として考えるかを絞っていかないと話が終わっちゃう。キーワードツリーがどんどんでかくなっちゃうと思う。

#### <明石座長>

- ・この専門部会で作りたいビジョンが、何年後のことかはっきりしていかなくちゃいけない。その辺りについて事務局から説明はあるか。

#### <事務局>

- ・10年後ぐらいを見据えて、まずは何から手をつける必要があるのか。どういうステップの中で、ありたい姿を目指すのかを決めていただければありがたい。10年後の姿を見据えたときに、やるべきことを議論いただいて、県としてやるべきことは事業化して、来年事業に落とし込んでいくというイメージ。

#### <明石座長>

- ・そういうイメージで10年を一つの区切りとしながら、できることは先にやりたい。

#### <山崎委員>

- ・10年というと、2033年とか2034年ですね。多分、両方見なきゃいけないと思うが、短期的に考えて、今をゼロベースにして何かを作り出す作業と、2033年には人口が例えば5分の1しかいなくなるとか、いろんなリソースが大分少なくなるのを前提に考えたときと大分違うと思う。
- ・10年後を前提として、今できることを考えるのはすごくいいと思う。問題は、その10年後の状況をちゃんと我々ができる限りの把握をしているかどうか。その辺も話し合って、例えば10年後に古民家を生かしたアグリツーリズムとかって、どういう形だったら、20年後も30年も続け

るようになるかっていうのは、せっかく専門家が集まっているから、議論したいところ。

#### <明石座長>

- ・当然 10 年後に人は増えることはないし、高齢化も進んで、放っておいたら特に田園地域には人が少なくなる。でもそのリソースが減っていくことを前提にした「10 年後に改めてどうすべきか」を考え、何でもかんでもやるわけではなくて、絞っていくとか、モデルを作ってそれを示すこととなるほどこうやればいいのかっていう真似できるものができるんじゃないか。
- ・成長戦略会議では、風の谷構想が、それこそ 50 年 100 年ビジョンと言っているのに対して、この専門部会では風の谷を 1 つモデルとしつつ、もうちょっと現実的に、10 年後できることを考えていきたいと思いますということ。

#### <川端委員>

- ・私が今勤務しているところで、10 年計画の事業がある。文化財的なものの調査（下張り文書剥がし）だが、これは 10 年かかると最初に思って始めた。余りにも量が多かったということと、私自身も専門的な古文書が専門外だったので、二、三年では無理だなと思った。お金をかければ外注して、多分二、三年でできるようぐらいの量だが、お金をかけて渡して終わりだと、それにかけた時間とかその間に得た知識とかを自分のものにすることができないし、地域のものとして残らないと思った。そのため、これをツールとして 10 年かけて、その地域の人たちの中でこれに関わる人たちを増やそうと思って、自分たちで取組みを始めようと思った。
- ・例えば文化財に限った話ではなく、何かに関わる人の割合を今より増やすことで、例えば人口が 5 分の 1 になっても、それに関わる割合を 5 倍にすることを目標にするとかであれば、人の減り具合を押さえたいけるのでは、と感じた。

#### <佐藤委員>

- ・目指すべきことは二つあると思う。これから必要になっていく人材の育成が第 1 であって、そのあとに技術的な面での進歩があると思っている。
- ・自分の地域で考えると、地域の相談役であると感じていた大事な方がお亡くなりになったり、若い方でこれから地域の中心になるだろうと思っていた方が地域を離れていたりしている。やっぱり 10 年後にスタートではもう遅過ぎると感じている。なので、まず人材育成。ファシリテーターの存在はとても大事なので、地域のファシリテーションができる方を増やしたい。

#### <明石座長>

- ・人を育てていく技術って必要。プロが関わっていかないと、いきなり地域の方にやれと言っても無理。進行というかファシリテーション、どういうふうに皆さんの意見をまとめて形にしていくんだっていうことの技術ってやっぱりそれなりにある。いきなり地域おこし協力隊ではなくて、今、地域にいる人を育てていく必要がある。
- ・田園地域の人づくりっていうのに予算がついてくとしたら、プロがつきっきりで、集落の特に若い方を対象に、これからの 10 年で地域づくりに関わっていく人を育てる講座みたいなものを作

り、OJTで横につきながら、話のまとめ方とかを教えてくれて、やらせて、自信をつけさせ、プロが離れても、サステイナブルなコミュニティとして運営できるということがものすごく大事。

- ・今まではコンサルタントが来て、さっとプロがまとめて、まとめた結果を納品して、いなくなる。だから地域が育たないと思っている。そういう人を育てていくプログラムを転換しないとけない。期待しては「さよなら」ではない形が必要。

#### <川端委員>

- ・先ほど発言した文化財のことと同じだと思う。取組みを始めて今8年目～7年目だが、ほとんど私が手を出さなくても参加者の方が、自分たちで教えたり、進めたりができるようになっている。それを目指したかったから、やっぱり10年必要だなと思う。

#### <荻布委員>

- ・私が田舎暮らしを意識し出した10年前から、大事なものを受け継ぐにはあと5年ぐらいしかないと言われていた。10年後を見据えて、人を育てる講座とか関わる人の割合を増やすとかいうことは必要だなと思いながら聞いていた。
- ・人材育成の講座について、地域の人々の技を伝承するという点と外からの視点で抽象化するという点の両方が入っている講座があるといい。私自身が富山に帰ってくるにあたって、パーマカルチャーというものを学んだ。いかに持続的に、生活体系だったり、農村空間だったり、農業生産をつくり出していくかというもの。昔から人々が行ってきたような農村にある生活の技術プラスそれを高い目線で見えてどう未来につなげるかということを話し合いながら実践し続けていくことが大事。
- ・テクノロジーの重要性と合わせて、箕作りや農作業の中にあるような「手でやることの価値」も一緒に俯瞰したい。

#### <明石座長>

- ・例えば農業とか林業とか、観光、仕事いろんなところから入っていくとそれが分野で切られたり、わかりやすい言葉に置き換えられてしまうが、田園で暮らして、人間関係を作って、最終的に幸せな人生を送ろうとした場合、何か持っていないといけないものがきっとある。その「何か」が中心にあると、今やろうとしていること全部がリンクしてくる気がする。それがないと、全部が分断されているような気がする。だから上手くいってないんじゃないかっていう。
- ・そういうものを共有できれば、食べものだとすると、化学肥料や農薬を使ったものではなく自然栽培の方がいいし、建物も10年後なんか人工物が単に劣化するだけで美しくなくなるとか、共通するテーマとかキーワードがあって、それがわかっしまえば、全部いちいち言われなくてもわかるみたいなことがあるのでは、と思っている。
- ・今日の話の中でヒントになるとすれば、多分「循環の中の一部に自分がいる」みたいなこと。自然の循環の中の、というのはすごく重要なキーワードになり得る気がする。

#### <荻布委員>

- ・人間が、自然を奪う存在ではなく、自然の生態系を豊かにする存在として知恵を使うという姿が理想。そのためにどうするかということなので、多分そこにヒントがあつてそれをずっと考え続けなきゃいけないんだろうなというふうに思う。

#### <山崎委員>

- ・先ほど話題にあがつた百姓という言葉が大好きで、最近調べたりしていた。「百姓」はもともと農民のことではなく、有名な名字を持っている人々以外の、他の名字を持っているたくさんの人々を全体的に百姓と呼んでいた。その人たちにはたくさんのスキルがあつて、当時の最先端のスキルを持っている人たちが活躍していた。左官や農家はもちろん、例えば桶を作れる人がいたりとか畳を作れる人がいたりとか。今で言う、ChatGPTの達人とかネット検索もプログラムもできる人とか、グラフィックデザインができる人とかいろんなことができるということだと思ふ。
- ・そういった意味では、我々が欲しているような人種、これから田園の方で人数がどんどん減っていてもいろんなことを自分たちで賄える人達。なおかつ、自然の循環の中で、必要な材料だけを使ってうまく生活できるような人たちを指していると思う。
- ・その中に、コミュニティをつくれてファシリテーションがうまくて、みんなで仲良くすると幸せになれるよね、とわかっているリーダーシップがとれるような人も百姓の技の一つとして捉えていかなきゃいけないのかなと思う。それがあれば人数どんどん減っても、この辺は諦めなきゃいけないけどこの辺は強化すれば何とか補えるよねっていうような生活の仕組みとか自分たちなりの自然を汚さない生態系みたいなものを徐々に考えながら作る。
- ・そういうちょっとカジュアルなノリで新しい人たちが田園風景ですてきな暮らしをしていたら、若い人たちが羨ましいなと思ってやって来るみたいな、そういった方向でいけたら、楽しいノリで人が集まりやすいのかなと思った。

#### <川端委員>

- ・私も百姓という言葉がすごく好き。自分が習いたいことや残していきたいこと、例えば美味しく沢庵を作ることであれば大根の干し方とか。そういったことにおいては、本を読むとかカルチャーセンターに行くのではなくて、近所の方に聞くのが一番勉強になるのではないかなと思う。
- ・伝統食についてはあの方、薪の切り方ならあの方という風に町の中にたくさんの先生がいると思う。先生になり得る方は高齢の方が多いので、若者や子供とその先生をペアにして、子供が先生を支えながら、先生は子供にその知恵を授けていく事業をやりたいと考えていた。
- ・百姓としての何かのスキルを持った人は、伝統的なことに関しては身近にすでについて、そういう分野はもう本当に直近5年ぐらいで動かないと伝承が間に合わない。

#### <明石座長>

- ・そういう人材はどの地域も欲している。しかし適任者がいないという問題があつて、そこから地域おこし協力隊という発想が生まれてきたと思うが、おそらく多くのミスマッチが起きてうまく

定着しないという問題もあると思う。

- ・最近若い子が地域に移住してきて何か貢献したいというのが当たり前のようにあって、あの子センスいいなという子が一つの町に1人ぐらいいるのではないかと思う。直接経済に貢献しなくても、間接的に二次的な経済効果があるのであれば、直接的にお金を稼がなくても必要な役割ではないか。そういう人が、お客さん相手に商売をして、それで生計を立てるのではなくて、必要な役割として地域に1人ぐらいは必要。人が少なくなってくるので、よりそういう時代になってくる。
- ・そういう方向性を示して、御用聞きやファシリテーションや企画といったことをちゃんと「仕事」として位置付けて、地域でそういう人を育てることができるといい。今回、田園地域でモデルとして人材を募集してみて、どういうスキルが必要なのかみんな寄ってたかって、その人をどういうふう育てていけばいいのかというビジョン考えたりとかもありだと思う。

#### <山崎委員>

- ・井波でジソウラボがマッププロジェクトという取組みをやっていて、すごく近いと思った。もともと瑞泉寺を建てた人が京都の東本願寺に雇われた宮大工で、そこから木彫り師の町になった。それを引き継いで、BE THE(MASTER)PIECEというプログラムでは、町に必要なスキルを持った人たちを育てている。
- ・例えば、baker's house KUBOTAの窪田さんは、中目黒で就業していたが、奥さんが高岡出身なので転職・独立を考えていたら、BE THE(MASTER)PIECEのパン屋の募集に応募してくれた。初めの3ヶ月は「nomi」というバーで下働きをしてパンを焼きながら、自分の顔と自分のパンを売って、地元の人に親しんでもらって、そこから建物ができ上がって独立してパン屋になって、町の人々が日々並んで買いに来るようなパン屋さんになった。地域で窪田さんを育て上げて、baker's house KUBOTAにしていった。
- ・それを支えるいろんなスキルの人たちがジソウラボにいて、それに賛同するジソウラボファンのコミュニティがあって、という現代風の百姓のグループみたいなことを井波でやっているなどと思う。だから、もうちょっと規模の小さい集落、千人ぐらいの集落でも似たようなことはすぐできるかなと思うし、そういった個人事業主でいろんなスキルを使って生業を立てたいという人たちに優遇制度を与えるということを県や市町村でできると、短期的にはそういった仕組みづくりに繋がるのかなと思う。

#### <明石座長>

- ・井波の場合は、そういう人を呼び込めるだけのセンスとかノウハウがある集団がいたからというものもある。その最初の第一歩を踏み出せるための基盤がすごく必要だと思っている。井波はすごくラッキーで、たまたま島田さんとか山川さんとかスーパーマンがいて、広がっているレアなケース。
- ・そういうスーパーマンを呼んでくるのは大変なので、例えば井波が何で盛り上がったかということ勉強しながらも、基本的にはスーパーマンを呼んでくる発想をやめて、どうやったら育てられるか・どうやったらこんな人が登場するんだということ、モデルを見ながら勉強するという

ことをやっていきたい。

#### <山崎委員>

- ずっと井波を観察しているが、あれをまるっとやるのは何十年もかかっちゃうと思う。要素を因数分解すると、島田さんがやっていることは町の長老業。山川さんがやっているのはデザイン業。山川さんがセンスを持っていて、島田さんが権限を持っている。だから、地域の権限のある人が、島田さんからスキルを学ぶんじゃないでなくて心構えを勉強する。山川さんがやっていることは、スキルとセンスなので、簡単には学べないんだけど、その土地なりのいいものを外部の能力、例えば、わりと費用のかからない地域外のデザイナーと手を組んで、その町なりのいいものを作るみたいにするると割とハードルが低いと思う。

#### <川端委員>

- 山川さん達が担っていらっしゃることをある企業がやるというのはどうか。今、そういう「人」を呼ぶのが難しいということであれば、例えばそういうことをやっている会社を呼んでくるという方法もあるのでは。
- 20年ぐらい前にベンチャー企業で働いたことがあって、コーポラティブハウスという建物を建てる支援をするコンサルみたいな会社。コーポラティブハウスとは、ある土地に住みたい住民希望の人が集まって、みんなで組合をつくり、その組合で設計をしたり業者さんに発注をしたりというふうにやっていく。できた後のそのマンションの組合も自分たちで運営をするというもの。そうやって建てたマンションには面白い人たちが結構住んでいて、会員紹介制だったが何千人も会員がいて、1棟に10人ぐらいしか入居できないので、大勢が入居待ちをしていた。ものすごくこだわりを詰めて自分たちでゼロから作る住まいなので、結構辺鄙な立地でも住みに行く。例えば私が今住んでいる地域でコーポラティブハウスがあれば、結構人が集まるのかなと思った。

#### <佐藤委員>

- 私たちが住んでいる近くに移住してこられた農家の方が、いい感じの空き家をどんどん買ってリノベーションして、新たな面白い人を呼び込んでいる。そういう取組みを本当はみんなですでたらいいが、井波の島田さんのようなことを1人でやっている。

#### <明石座長>

- 観光掘り起こしとか空き家の話とか、テクノロジーをしっかりと使おうとか、ラベルの貼り替えによって、なんてことないものも素敵になるよということは多分そういう人の手にかかればあつという間だと思う。そういう人さえいれば、今議論していることは自動的に形になって進んでいく気がする。
- 「結局人でしょ」というフレーズがあるが、その「人」の解像度が非常に荒い。どんな人がその地域にいたらいいんだろうかというのは、もっと徹底的に考えるべき。

#### <山崎委員>



- ・ どのような人が欲しいかというのは、チャート的につくれそうな気がする。能力とか経験とか性格とか。最終的には、誰がリーダーシップを取るか決めなきゃいけない。その時に、あそこの名家の息子がとか、あそこの若旦那がとかで決めるんじゃないで、きちんと表みたいなものを持って、ちゃんと当てはまる人にする。そういうやり方もありかなと思う。それが地域内にいないのであれば、東京に出た親戚とか息子とかを探し出すのがいいと思う。農村地域は特に地縁があった方がいい。
- ・ そういったものを割と地味に考えていく。人的リソースの戦略も必要。
- ・ そういった人たちを、例えば県でプログラムを作って、長い間かけて、どうやったら農村としても生き抜くための力がつけられるかというトレーニングみたいなのもやっていくといい。
- ・ 往々にして、人が少なくなってくるとコミュニケーションが雑だったりして、コミュニティが壊れるパターンが多い。それをまとめる人を考えてないといけないし、長期的な目線を持って周りの人にうまく伝える能力が必要だと思うので、そういったものを年に何回かのトレーニングとかみんなで集まって座談会やるとか勉強会みたいなことで補っていったらいいのかなとも思う。

#### <明石座長>

- ・ 注意すべきは、「地域おこし協力隊と一緒に」と言われそうなので、そこでの差別化として目指しているものが違うと言い切れるものをしっかり作っておかないといけない。人的リソースの戦略は、今まで本当にやってきていないと思う。
- ・ やっぱり人だよねということで、多様性に頼りすぎてしまったが、それが通じるのは50年前ぐらいの話であって、今、人が減ってくる中でやっぱ戦略的にやっていかないといけない。特に田園地域であればなおさら戦略を打っていかないと、放っておいたらなくなる集落もあるんじゃないかという気がしている。

#### <佐藤委員>

- ・ 市町村のような大きいパートで活動している方は実はいるが、地域のもともと住民がそれを知る機会があまりなくて、もったいないと思っている。井波の島田さんのような方から、どんな活動しているのか学ぶ機会があればいい。

#### <荻布委員>

- ・ プログラムがあるといいと思った。県で首都圏に住んでいる人向けのスタートアッププログラムをやっているが、そういう雰囲気プログラムを県内ではやっていないのではないかな。今、話しているような方は首都圏向けスタートアッププログラムのような雰囲気が合うように思う。
- ・ 男女共同参画委員になっているが、ものすごく形骸化している。理念は大事なポイントだと思うが、何十年前のやり方を続けているみたいなのところがあったりする。そういうところの見直しも大事ではないかな。

#### <事務局から下記事業について概要説明>

- ・ T-startup

- ・スタートアッププログラム in 東京
- ・デジポック

#### <明石座長>

- ・育成プログラムというと、ちょっと違うかなという気もする。相当時間を使って伴走して、1人が10人教えるみたいなこともまた難しい。単年度に何人と決めて、徹底的にOJTでつきっきりで地域と一緒にいって、こうやって計画を作るんだよ、まとめるんだよとかをやっていく。その人がまた地域で違う人と組んだりして、実際のプロジェクトからまた学んでとか、そういう階層が必要なのかなと思う。それを10年かけてやっていかないといけない。

#### <山崎委員>

- ・これは、長期的に予算のコミットと県と市町村で人事的なコミットをしなきゃいけない。今の制度のままだと人がバンバン動いちゃうから。予算も単年度だからやりづらい。あとは企業も入ったほうがいいと思う。官民連携というか企業のお金も入れて、そういったプログラムを作っていくといけない。
- ・そういう人材を育てる取組みをソフトでやるのもちょっとしんどいし、人がいなくなったら続かない。例えば機材を買ってきて、AIが勝手にあぜ道の急勾配の草刈をしてくれるロボットを買ってくるのもちょっと違う。そうじゃなくて、企業を育てるべきだと思う。
- ・例えば、高岡の中小企業とAI系の仕事をしてきて独立したAさん、それから富山県または砺波市とかが手を組んでその会社を育てるみたいにする。その会社が出してきた実証実験レベルのプログラムとかサービスを、県がとりあえず買ってあげて、その地域で使ってみて、磨いてあげて成功させてあげる。うちは富山県、砺波市に認定されたあぜ道ロボットです、というふうにして成長させるみたいなことを10年かけてやれば、その企業がどんどん横展開していく。企業なので勝手に自分たちで人を育てるはず。
- ・ポートランドでアーリーアダプタープログラムというのをずっとやっていた。ポートランドではスタートアップの会社に地域課題解決のプレゼンをさせて、そのプロジェクトを作る過程にお金を出したり、もうプロジェクトができ上がっているのであれば実証実験的に自治体が優先的に買ってあげたりした。できれば育つので。育てたら今度その企業が横展開して、例えば、当時はバスアプリがあったが公共交通のアプリをシアトルに売り込むとかボストンに売り込むという時に、「うちのアプリは他のアプリと違ってもう街で実装されて、ポートランド市に認定を受けています」と宣伝できる。それってすごく差別化が図れる。
- ・それに近いような感じでまず企業を育てる。その企業のサービスとかプロダクトを優先的に買ってあげて、さらなる成長を遂げてもらうみたいなことをやれば、おのずと人材が育つと思う。

#### <明石座長>

- ・企業の方がその後の成長とか横展開が非常にイメージできるんじゃないかという話。地域おこし協力隊との差別化も明確になるので僕もその通りだと思うが、委員の皆さんのイメージはどうか。

#### <川端委員>

- ・企業も結局は中の人やっている。田園地域に求められることをするスタートアップということであれば企業はありだと思う。逆に個人の方だと、すでに地域で活躍している方がいたら、他の個人をあてにくいということもある。

#### <佐藤委員>

- ・人材育成と技術開発のうち、技術開発のところはそれがいいと思う。人材育成に関しては分けて考えたらいいのではないか。

#### <明石座長>

- ・企業となると最初は1人でも、社員が2人3人と増えてくると、最初の1人が企業を育てるというイメージではなくなる。そのため、その企業の中核となす人を最初の個の段階で、伴走者がいて企業を盛り立ててあげて、そのあと社員が複数になってくるようなタイミングで地域がどんどん関わってきて、企業を盛り上げていくという感じになるのでは。

#### <山崎委員>

- ・長期的に会社を育てるにはやっぱり、次世代の幹部候補が必ず必要になる。その辺を、県や市町村がお金を出すのであれば、コーチをつけてとかやっていくことは可能だし、それだと本当にオンザジョブトレーニングで育てないといけない。それが、ただのスキルアップだと現場がないから座学で終わってしまうことが多い。企業の仕事を通じていろんなスキルを学んで、その間ずっと企業からお給料をもらうわけだから、すごく理にかなってはいる。ただ、教える内容が、本当に個々の企業によって変わってきてしまうので、一般的に今までみたいに横展開できるスキルをみんなというふうにはいかないと思う。
- ・テクノロジーについては、日々変わっていくもの。昔は靴がない時代に草履を作るのがハイテクだったわけだから、そういった意味では何でも含まれてしまうのかなと思う。AIが当たり前になってくると次のものが出てくる。今は日々AI使わないが、20年前はようやくインターネットを使い始めた頃だった。それが今みんなスマホでサクサクやっている。
- ・そういった意味では、人材育成とテクノロジー活用を分けるというよりも、全部が日常生活に必要なスキル、そしてそれよりもちょっとスペシャルな、例えばファシリテーションのスキルを育てるというイメージ。地域の歴史を探るスキルも、普通の人がちよっと教わって何となくできるようになって、年を経つとそれが当たり前になるみたいなことが、人が少なくなる集落が生き残るには必要かなと思う。

#### <荻布委員>

- ・企業が農村に関わるイメージっていうのは、企業が持っているリソースをどう田園地域に活かすかということか。企業側のモチベーションは、新たな事業展開などか。

#### <山崎委員>

- ・企業の規模にもよると思うが、本当に誰か個人が農村を救いたいと思って、自分がことを起こして役立ちたいと思っている人がいて、アイデアがあるとする。でもお金もないし組織力もないから、例えば呉西地区の中小企業から支援をもらって、人もあてがってもらい、会社としてAさんの株式会社Aを立ち上げて、そのバックの呉西地域の企業Bと一緒に会社を作って、その地域の農村の社会課題の解決、あぜ道の草刈とか、そういったことの解決に当たる。その企業が育てば育つほどそこに人が必要になるし、そこでうまくいったことを他の地区でも展開して行って、会社が伸びると人を雇って、その人がいろんなスキルを学んで、それが増えて行ってということをついやる分野でできていけばいいのではと思う。
- ・企業と言っても新しくできた企業は本当に1人から始まるので、本当に小さい法人という意味。法人じゃないとお金の投資ができない。個人だと投資対象になるのが難しいので、やっぱり企業という箱を使って、会社を成長させていくというのがいいと思う。そしてそれは地域の雇用にも繋がるというのが、企業の文脈。
- ・企業誘致ではなく、地元の人が地元で体験させて育てる。足りないスキルは外から持ってくればいいが、企業の資本の持ち主は絶対地元。そうしないとお金の循環が生まれないと、雇用の意味がなくなってしまう。それをプラットフォームとして、人を育てていくことができれば、たくさんの方が解決できる。今はそれをやるビジネスプロデューサー的な人が少ない。

#### <明石座長>

- ・10年後をゴールとしたときの取組みとして、今日話したようなことはすぐに取り組みやすいし、県としても施策を打っていきそうな気がする。気をつけなくてはいけないのは、建付けを間違えると理解されなかったり、誤解が生まれるかもしれないということで、次の会議では今日の話をこういう構造ですかという紙にまとめてみて、皆さんと確認をする作業が必要かなと思う。

#### <佐藤委員>

- ・企業を育てていくというのももちろん大事なことで、二つの柱のうちの一つだと思っている。地域のプレーヤーを発掘して育てていくということも並行してやっていないと、5年10年と持っていられない、地域の課題解決には繋がらないと思う。

#### <明石座長>

- ・「企業」について、プロフェッショナルかつ企業的なやり方じゃないと解決できないことがあるというお話だと理解している。プロフェッショナルとまでいかずとも、ずっと地域に住んでいる人たちにエンパワーメントして、交渉などのある程度のスキルを学びながら、地域解決の手法を学び、育てるということも同時並行で必要。分けて考えないといけないということ。

#### <川端委員>

- ・祖父から聞いた昔の話だが、私の祖父が戦争から帰ってきてから、田んぼを持っていなかったの

で、働く場所がなかった。そこで思ったのは、商売になるのは、今この地域にないもので必要とされているものだと考えた。それで、今一番儲けられるものは今この地域に足りないものだと考えた。そこで牛乳を買う場所がなかったから、牛乳を仕入れて売ろうとした。その時、私の祖父はお金を持ってなかったが、動くことができるので配達をやったりとか、とにかく動く人で、近所に住んでいる地主さんみたいな方にお金を出してもらって、営業が上手なもう一人を含めて三人で商売を始めた。でも牛乳だけが足りないものじゃなくて、次は布団の綿を打ち直すところがないと思ったらしく、じゃあそれをやろうというふうにどんどん増やしていった。

- 祖父の本職は鍛冶屋。馬の蹄鉄専門の鍛冶屋で、牛もやっていて、家の横に広い草原を作って、そこで農家の人の馬や牛を預かって鍛冶をやった後に返しに行く。その時に訪問をするので、別の物も届けることができる。そうやってお金も土地もなかったのに、「この地域には何がないか」を考えたら商売になるんだという発想で、どんどん職業を増やしていった。最終的には農業が機械化して馬や牛が必要なくなってしまったので、鍛冶屋を続けることができなくて、保険の仕事をするようになった。
- やっぱり手法としては、この田園地域に足りなくて、維持をするために必要なものを個人で賄えないなら小さい規模でもいいから企業を育てる、支援をしていくということも大事。
- 10年後に結果が出るイメージでは、今、博物館で14歳の挑戦をよく受け入れている。中学2年生が1週間ぐらい、いろんな企業に行って自分の興味のあるところで学ぶ取組み。子ども時代に博物館に遊びに来ていた子や、14歳の挑戦で来てくれた方が大人になってうちの博物館で働きたいんですと言ってくれた。学校の中でやっているプログラムに地域のことを学ぶ機会をまぜ込んでいくのも地味だけど確実だと思う。

#### <山崎委員>

- 14歳ってすごくいい時期。川端委員のおじいさんみたいな人たちが、これからもっと増えていかないと、小さい人口の地域は立ち行かなくなる。先ほど佐藤委員が発言されたその地域のプレーヤーを育てるという文脈と僕が企業の文脈で言ったことは、実はそこに集約されるかなと思う。
- だから、自分で自分の生業を見つけて、それが成長するにあたっては、会社となり、次のステップを踏んでいく。川端委員のおじいさんはその牛乳の事業を売って、その儲けたお金で次のことやってもいい。だんだんやってくと、保険屋っていいよねみたいに自分が将来やりたいことに当たる。それを良しとする地域みたいなことをやっていくのがいいのではないかな。
- 今まで通り、塾に行ってもいい高校行っていい大学行ってじゃなくて、中学校2年生ぐらいで、違う道もあって、そっちのほうが楽しそうだと知ることができる。しかも、田園地域での企業はデジタルスタートアップと違って、スケールして株売ってなんぼの世界じゃない。好きなことを見つけて維持できればいいから、それってすごく素敵なライフスタイルで、それをやった方が自分の性に合っていると思った子達は、受験戦争とエリート主義から抜け出して、自分のやりたいことで腕を磨いて行って、いろんな講座を学んで、その中にファシリテーションのスキルとかコミュニティをまとめるスキルとか、いろんな方々と話をして何かを解決するスキルもつけていけばいいと思う。
- そういう人たちが増えていく方が、未来は明るいと思う。なので、県のプログラムに何を落とし

込むかっていうと、アントレプレナーシップトレーニング。何をやっても構わない、その代わりに社会の役に立ってお金が稼げるようになりなさいってことをいろんな人から教わる。それで自分の道を切り開いて、大人になったらやるじゃなくて今からやる。高校生でも会社を持てるし、日本でもそういうことができるようなプログラムを作ってしまうえば、受験から外れてしまっても自分の腕で稼ぐ方向に早めに振った方が長い時間をかけてうまく成功する可能性がある。心も折れないというか、受験に失敗してから別の道を考えても心が折れている場合が多い。

#### <明石座長>

- ・少し話が戻るが、企業と地域プレーヤーを分けて考えようかみたいな話もあったが、一緒ではないかという気がしてきた。「企業」というと、急に「組織」というイメージがするが、先ほど山崎委員がおっしゃったように、例えばそこに投資や補助金、委託等が入る場合は個人じゃなくてやっぱり会社組織が必要なので、形として会社という手を取るけども、実質はあくまでも人というか個人としてお付き合いするイメージだと。
- ・その個人が誘致みたいに外からやってくる場合もあるが、おそらく多くの場合は、若くしてなんか町に貢献したいという人がいたら、川端委員のおじいちゃんのように、まずは牛乳配達ぐらいだったら俺もできるかもから始まって、そこから不動産面白いなっていうので、何かその地域課題の解決に繋がることをやってみようとなる。そういう人がいずれ企業になる可能性もあるだろうということを考えると、住民か外の人かではなく、アントレプレナーシップを持っている人を対象にするということがいいのではないかな。
- ・学校教育を受けるうちから、物心ついて何か将来何しようかなと思いはじめた頃に、いろんな大人、いろんな企業、いろんな地域に行って学んで、自分の将来の可能性を広げてあげる。また大学を出たころには、詰まらない仕事をするよりも自分が自立して、地域で何かやってくんだということを、社会が応援できるようなプログラムになっているというのがいいのかなと思う。そのため、企業と個人を分けなくていいのかなと思った。